

《何故、日本は戦ったのか》

〈 海軍編 -前編- 〉

日本政府が対ロシア戦争を本気で意識したのは、日英同盟締結によってようやく肝が据わったからである。当時世界一の陸軍を有する大国ロシアに対して、日本の陸軍は到底比肩できるものではないが、こと海軍に関してならば、見方によっては優っていたともいえる。それは量的ではなく質の観点からである。

注) 日英同盟

日本とイギリスとの間の軍事同盟。1902年1月30日にロシア帝国の極東進出政策への対抗を目的としてイギリス外務省において日本駐英公使林董とイギリス外相第5代ランズダウン侯爵ヘンリー・ペティ＝フィッツモーリスの間で調印された。その後、第二次（1905年）、第三次（1911年）と継続更新されたが、1921年のワシントン海軍軍縮会議の結果調印された四カ国条約成立に伴って、1923年8月17日に失効した。

新しい国家の誕生から約40年にも満たぬ間に、日本海軍は列強諸国と肩を並べるに至った。この海軍を作り上げたのが海軍の不良番長と称された山本権兵衛と山本を見込み信頼し任せた、西郷従道の功績である。



山本権兵衛



西郷従道

二人の将軍のリアリズムから生まれたのが六六艦隊創設であった。帝国主義の時代に

においては海に囲まれた日本の場合、まず「海軍力」が重要な鍵となる。当時、日清戦争から僅か1年後、精強バルチック艦隊を擁するロシアを仮想敵国とするならば安閑としてはおられない。三国干渉もあり、海軍は大きな焦燥感に駆られていた。明治29年（1896年）山本は当時の西郷従道海相に呼ばれ、海軍がこれから進むべき道を示し、且つ実行策を立案せよ…との命令を受けた。この時山本が発案したのが「六・六艦隊構想」と呼ばれるものだった。

注) 三国干渉

1895年（明治28年）4月23日にフランス、ドイツ帝国、ロシア帝国の三国が日本に対して行った勧告。日本と清の間で結ばれた下関条約に基づき日本に割譲された遼東半島を清に返還することを求める内容だった。

10年間の長期計画により、ロシアその他の国の海軍の軍事力から計画された戦艦六隻・巡洋艦六隻を揃え、その他の艦艇を含めると合計で109隻、20万2,690トンを整備するという壮大なプラン、壮大なグランドデザインであった。後の日本海海戦の奇跡の勝利を遂げた連合艦隊の主力はこの構想の中で産声を上げる。山本の慧眼が窺えるとともに、確固たる信念をもって海軍発展のグランドデザインを描いた彼こそ、日本海海戦勝利の立役者であり、政治的にサポートし、計画が功を奏する時期を正確に読んでいた西郷の判断は恐るべきものであった。この壮大なプランには、イギリスのヴィッカーズ社と契約した近代装備の最新鋭戦艦「三笠」の建造が絶対に必要であったが、予算不足により暗礁にのり上げた。

三笠は連合艦隊の旗艦（司令官やその幕僚が座乗し、指令・命令を発する艦を指す海軍用語）となり、その存在が日本海軍の象徴になった事を思えばまさしく国運を左右する問題だった。困った山本が相談を持ち掛けたのが当時内務大臣と海軍大臣を務めていた西郷従道だった。大きな目をギョロリと見開いて「権兵衛どん、それは国家の一大事じゃ。早急に三笠を発注せねばならん。とにかく手付金を送るべきだ。金？ そんなものは別の予算から流用すればよか」と困惑する山本に西郷は、海軍大臣の経験がある薩摩出身の樺山資紀（カバヤマスケノリ）を呼んで、予算流用は三人でやることを告げた。国家の重大事に予算流用も仕方あるまい。もしこれが違憲として責任を問われたら、俺たち三人が二重橋で腹を切ればすむ。三人死んでも三笠が出来れば、それでよか」と。かなり過激な発想であったが、この太っ腹の西郷の言葉に山本も従うことにした。腹を切ればすむ。それより三笠の方が大事だと、山本も違憲を承知で腹を括った。こうして三笠は無事発注され、明治35年（1902年）5月横須賀に到着した。

この年1月には日英同盟が成立、翌年12月戦艦三笠は連合艦隊旗艦となり、後の日露戦争の海戦を勝利に導いた。西郷は三笠が日本に到着した2ヶ月後の7月、見届けたかのように病死する。山本は日露戦争が終結するまで海軍大臣として八年間を勤め上げた。その手腕の見事さは連合艦隊司令長官に東郷平八郎を抜擢したことや「海上権」と

いう新しい概念を持っていたことなどが指摘される。理論家でありながら、直面する現実をしっかりと見据える事の出来た現実家でもあった。山本の「リアリズム」重視を西郷は積極的に支持した。1万5000トンの戦艦四隻と9000トンの一等巡洋艦六隻を新造するには莫大な資金が必要であり、計画案がすんなりと議会を通過するはずはなかった。なにしろ総予算は2億1,310万円という莫大な額に上がっており、議会内には反対の声が多かったのは当然であったろう。

当時「憲政の神様」といわれた尾崎行雄（日本の議会政治の黎明期から戦後に至るまで衆議院議員を務め、当選回数・議員勤続年数・最高齢議員記録と複数の日本記録を有することから「憲政の神様」「議会政治の父」と呼ばれる）。と西郷のやり取りは有名である。尾崎の鋭い質問に対し、西郷は終始ぬらりくらしと珍回答を繰り返しながら、最後は実に真面目な顔でこう結んだ。「何しろ軍艦は鉄でつくります。金がかかかりますので宜しくお願いします。」と平然としていた。



横須賀市の三笠公園に戦艦三笠が保存されている。中央は東郷平八郎像。

「六六艦隊構想」を実現していくうえで、見逃してならないのは民間レベルの協力であった。ジャーナリズムでは「徳富蘇峰」や「福沢諭吉」が支持した。議会では「六六艦隊構想」に対し、「海軍力の増強に金を使うより工業の近代化を図れ」との反対が出ていた。これに対し福沢諭吉は「軍艦なければ国防あり得ず」「海軍抜きにして独立はできない」という内容を新聞で主張し、「増税もやむなし」と言う論陣を張っている。



徳富蘇峰



福沢諭吉

また「奨兵会議会」による国庫証券の販売、内田良平による「黒龍会」によるロシア語通訳教育（ロシア語通訳として従軍の為）、奥村五百子（おくむらいおこ）の愛国婦人会創設（46万人、閑院宮妃を会長にいただく）等、一般国民に至るまで日本を守る為「己を捨て、目的に向かって進む」と言う姿勢が「一致協力」と言う結果をもたらし、これこそが勝てそうもない巨大な敵に向かって、見事に勝利をつかんだ「明治人の原点」だったのであるまいか！！現代の日本に教訓を探すならば、「国防の為に」との「一致協力」である。集团的自衛権に対する野党や左派の在り様には無念の感が生じる。

話を六六艦隊構想に戻す。

こうして山本が立案して、西郷が議会の可決と明治天皇の裁可を得た。西郷は兄の隆盛によく似ていて細かなことは知らない振りをしてながら、実は極めて緻密であり、知恵も度量もあった。器の大きさでは兄に劣らず、人との交渉に長け、その上西郷は人を見る目も確かで、見込んだ人物には徹底的に目を掛けた。それは単なる依怙彘肩でなく、人物の実力を見極めたうえでのことであつた。西郷が見込んだ一人が同じ薩摩出身の山本権兵衛であつたのだ。

次回からは、山本・西郷・東郷・秋山・広瀬等、日本海軍の人物像をエピソードを交えながら歴史を覗き見てみたい。

平成 27 年 10 月 12 日

志雲会代表 有馬正能